

# 防災シンポジウムに参加して

みなさん、こんにちは！ 高橋幸子です。朝晩めっきり寒くなって、気温の変化も激しい今日この頃、体調を崩していませんか？

最近の私はあちこち出かける機会が多く、友達とお酒を飲みに行ったり、いろいろなところに出かけています。

私は福祉ホームに入居して2年半になります。障害は生まれつきの脳性マヒで、日常生活は電動車いすを使っています。

今回は、10月8日にウインクあいちで開催された防災シンポジウムに参加したので、その様子をレポートしたいと思います。



私は、10月8日、ウインク愛知で開催された、愛知県重度障害者団体連絡協議会主催による『徹底検証 大地震発生！ そのとき障がい者は……』というシンポジウムに参加しました。

シンポジウムは2部構成で、第1部は福島県被災地障がい者支援センター代表白石清春さんと、いわき障がい者自立生活センター事務局長小野和佳さん、また、C I L たすけっと（仙台市）事務局長の井上朝子さんが、それぞれ東日本大震災の被災体験を話されました。

## 地震の恐怖

小野さんは、地震発生時に郡山市の総合福祉センターにいたそうです。非常に長い揺れで「もうこれで終わりかな」と思ったら、本震のあとに次から次へと余震が襲ってきたそうです。エレベーターは止まっていて、ヘルパーやお客さんに手伝ってもらいながら1階に降りたそうです。

事務所に戻ると、足の踏み場もなく、家に帰ると電気と水道が止まっていて、電話もつながらなかったそうです。

地震で電気や水道が止まり、さらにガソリンも不足したため、ヘルパー派遣が厳しくなった障がい者は、一般避難所だった障害者福祉センターに避難し、自立生活センターの職員が3交代で支援に当たったそうです。講師の方の話しぶりから、地震発生時の状況が伝わってきて、もし東日本大

震災のような地震が愛知県で起こって、電気も水道も交通機関も止まり、さらにガソリン不足になると、私たち障がい者は逃げるのが困難になり、ヘルパーの派遣も難しくなります。そうすると名古屋市はどうなってしまうのかと思うと、とても怖くなりました。

福島県では地震と津波の影響で、原発事故が起こり、大変な状況になりましたが、全国各地に呼びかけ、日々、復興に向けて歩いていっているそうです。



## 被災当事者が被災者の支援に立ち上がる

次にお話をされた井上朝子さんは、C I L たすけっと事務局長の方でした。震災直後のパニックの中、ヘルパーや事務所のスタッフと一緒に、どうやって危機を乗り越えていったのかということをお話されました。事務所のスタッフやヘルパーが強い揺れから守ってくれたこと、避難所へ訪れたときの衝撃、障がい者が避難所の中で、動きたくても動けず、方向転換さえもできない状況がくわ

しく伝わってきました。

震災後、井上さんは自分たちが何かしなければならぬという思いから、全国から届いた支援物資を避難所にいる障がい者に届け、避難所をまわり、被災状況の確認作業を続けたそうです。

その後、3月の終わりに県内の障がい者関係団体が集まり、「被災地障がい者センターみやぎ」が発足しました。被災地障がい者センターは宮城県だけでなく、岩手県や福島県にもでき、当事者が主体になって、当たり前には生きられる地域づくりをめざしているそうです。

被災地の1日も早い復興を願ってやみません。



## 東海豪雨の被災体験が今もよみがえる

シンポジウムには東海集中豪雨を経験された女性も講師としていらっしゃいました。その方はそううつ病という診断を受けた方でした。東海集中豪雨のとき、堤防が決壊し、避難所に避難したそうです。避難生活で大変だったのは、トイレの水を流せなかったことだそうです。洪水がひいたとき、自宅に戻ることができ、そこで見たものは、家中を浄化槽からあふれた汚物が漂っていた光景だそうです。女性は、その後の災害で避難されている方を想うとき、いつもこの光景が重なるそうです。

私は女性の話を聞いて、東海豪雨のことを思い出しました。夜中雨が降り続き、家が水の中に沈まないかと不安で怖かったことを思い出しました。私は東海地方に台風が来ると、そのときの気持ちを思い出します。

女性は東海豪雨直後、家の中の光景を見た瞬間

から、辛い記憶で体中を駆け巡り、どのようにして病院に行ったのかは、とても言葉には言い表せないそうです。

## 取り残されるのはいつも災害弱者

シンポジウムの後半で、メインストリーム協会の副代表玉木幸則さんが、阪神淡路大震災の経験を話されました。

話の中で私が印象に残った言葉は「阪神淡路大震災の経験が今回の震災でまったく役に立たなかった」という言葉でした。阪神淡路大震災後、防災計画が作られたのですが、市民は、防災計画をほとんど知らないそうです。

玉木さんは最後に、復興とは街をどう再生させ、どうやって地震に強い街を作るか創造することではないかということをお話していました。

## 私たちにできること

私がこのシンポジウムで感じたことは、単純に地震は怖いということです。そして私たちにできることは、被災地の状況をよく知り、私たちの街にも来るかもしれない東海・東南海・南海地震に備えることだと強く思いました。でも、何をしたらよいのだろうか？と考えさせられました。

いざという時、力になるのは日頃の人と人のつながりではないかな。助けたり、誰かの力になったりすること。だから日々、地域の中で根を張って、精一杯生きること、私たちにできることの一つだと思います。

11月、デイセンターの仲間と被災地宮城を訪ねる機会がありました。続いて、実際に見て感じたことをお伝えします。

## 被災地を訪れて思ったこと・・・

みなさん、こんにちは！

防災シンポジウムのレポートに引き続き、またまた登場の高橋幸子です。私は生まれつきの脳性マヒで、日常生活では、電動車イスを利用しています。



私は11月16日から18日まで、デイセンターの仲間と2泊3日で仙台に行ってきました。津波のつめあとをじかに見て、仙台で暮らす障がい者に話を聞き、さらに観光や仙台の名物を食べることで、わずかではあるものの復興支援の力になればと思い、今回はその様子を書きます。



11月16日に、デイセンターの仲間である白井君、塩崎君、ヘルパー派遣事業所・マイライフの職員、実習生2人とサマリアハウスの職員、それに私で、東海道新幹線と東北新幹線を乗り継ぎ、仙台に向かいました。

新幹線には何度か乗ったことがありますが、長時間座っていたので体がしんどかったです。

仙台に着いたのは午後2時半でした。

### 見渡す限りの荒野

仙台に着いてすぐに、先に支援に行っていた専務理事の山田昭義さんたちと合流し、車で宮城野区蒲生・若林地区に向かいました。そこは見渡す限りの荒野で、だいぶきれいにはなっていたのですが、ところどころに倒壊した家屋やがれきが残っており、トラックや工事車両が何台も行き来し、撤去作業を行っていました。

私たちは車で通れるぎりぎりの場所を通り、できるだけ近くまで行って見学しました。道路はがたがたで陥没しているところも多くありました。行ける人は海岸に降りていって見学しました。がれき置き場として利用されていたのは、海辺から500メートル近くにあった小学校のグラウンドでした。

そんな荒地の中で、農作業をしているお年寄りが見え、立派な野菜をそだている光景が、とても印象的でした。

### 観光名所 松島海岸

2日目の11月17日は、朝の9時にホテルを出発し、車で松島海岸に移動しました。海岸付近を散策し、観光名所になっている道路沿いの道路に面したお店を何件か回り、お話を聞きました。

松島には島がいくつかあって、そのおかげで津波の威力は弱まったと言われていますが、それでも震災当時は3.8メートルまで津波が上がり、お店の中も腰上あたりまで水が来たそうです。1週間ほどで水はひいたものの、泥をかきだす作業が大変だったそうです。食べ物を扱うお店は、津波で商品が溢れ出してしまい、それを持っていく人がたくさんいたそうです。お店の人は、「持っていくな」とも、「差し上げます」とも言えず、そのときの状況に身を任せていたそうです。

途中で立ち寄ったお土産屋さんには、当時の写真やお店の再開までの記録を新聞記事などに残し、お店の目立つところに貼りだしていました。

昼食後、車で、東松島市に向かいました。被害がひどく、いまだ手付かずのかれきや建物が残っているところでした。海はとてもきれいでしたが、風が強く、吹き飛ばされそうになりました。

## 地域生活支援センター カノン を訪ねて

その後、市内の矢本駅近くにある『社会福祉法人矢本愛育会・東まつしま地域生活支援センターカノン』を訪問しました。

カノンは、障害者の日中活動（サロン）を中心に、当事者同士が協力しながら社会復帰を目指すことを目的とした施設で、喫茶店も当事者の方が経営しています。今回、カノンのスタッフの相澤安伸さんに、震災当時の状況や、現在に至るまでの活動、今後の不安などの話を聞きました。

一緒に行った白井君が、あらかじめ用意した質問に相澤さんが答える形で、話が進みました。

### Q. 地震に対して、どのような備えをしておくといいですか？

**相澤** 精神障害の人が多かったので、カルテに近い個人情報が必要とされた。東松島市には昔から、『津波が来ても大丈夫』という根拠のない言い伝えがあり、自分たちもこの事務所までは来ないだろうと思い、パソコンや紙ベースなどはそのままにしていた。が、津波ですべて流され、利用者の個人情報が不明になってしまった。現在は法人が一括で管理している。

### Q. 避難所生活はいかがでしたか？

**相澤** 福祉避難所は高齢者が中心のところが多く、障害のある人は入所施設のほうへ回ってというところもあった。精神障害の人は環境の変化に対応できなかったり、薬を飲めない人が多く。避難所で生活ができなくなり、住むところを転々とした人もいた。反対に引きこもりの人が避難所で生活することで、今まで昼夜逆転していた人が規則正しい生活に戻ったケースもあった。

### Q. いつから3食食べられるようになりましたか？

**相澤** 避難所生活では災害発生直後1週間は手持ちの食料をみんなで分けながらしのいでいた。その後は救援物資が届き始め、満足に行くほどではないが3食食べられるようになった。

### Q. 地震発生後の政府(市)の対応はどうか？

**相澤** 復興計画も未だできていない。仮設住宅に住んでいる人たちが地域に出るとき、住むところがない。仮設住宅に入れるのか？ 入ったとしても車いすの人は住めるのか？ どの地域に住むのか？ など、懸念材料はいっぱいある。

### Q. みんなの気持ちは今どうですか？

**相澤** 8ヶ月経ち、気持ちは落ち着いている。ただ、利用者（特に精神障害の人たち）は、災害について語りたくないという人も多く、救援が受けられるという話にもあまりのってこない。災害発生時は、わけが分からず、スタッフみんなの気持ちは高揚していた。今現在、気持ちは落ち込んでいない。落ち込んでいられない。スタッフが下を向くと、利用者も一緒に下を向いてしまうから。今は楽しみながらやっている。そうじゃないとやっていられない。

### Q. 今したいこと、してもらいたいことはなんですか？

**相澤** 利用者は元の生活に戻りたいという。が、それは無理。安定した生活ができるよう、やれることをやるしかない。

## 日和山公園から見たもの

カノンを訪問後、石巻市にある日和山公園に移動しました。公園からは海沿いが一望でき、テレビでも大きく取り上げられた石巻市立病院とその周辺を見ました。



仙台市内の被災地とは明らかに違い、手付かずというよりは、手をつけても被害の範囲が広すぎて追いつかないといった感じでした。1日目に訪れた被災現場よりも道がボコボコだったり、ガードレールがねじ曲がっていたりしました。私は職員さんに背負ってもらって現場まで行きましたが、それでも前に進むのが難しい状況でした。

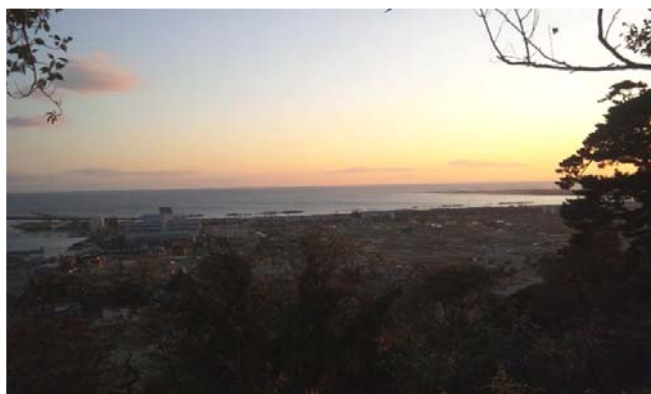
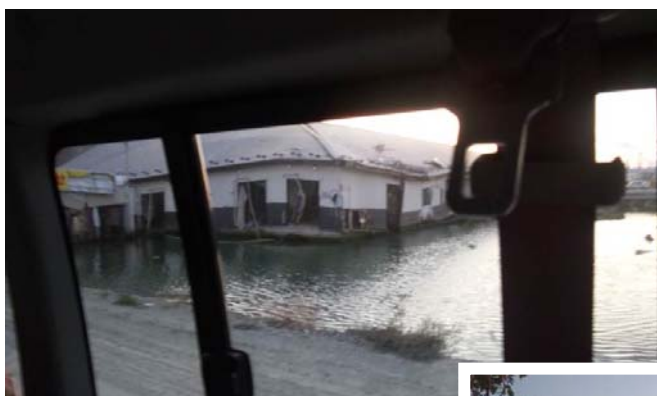
## 復旧復興に向けた取り組み

3日目は地下鉄に乗って青葉区春日町にある『せんだいメディアテーク』へ向かいました。ここはもともと図書館・ギャラリー・イベントホールなどがある複合文化施設ですが、震災後は『3がつ11にちをわすれないためにセンター』というブースを開設し、さまざまなジャンルの人たちが映像や写真などといったさまざまな形で、復旧や復興に向けての取り組みを行っています。

## まとめ

今回、デイセンターの仲間と仙台へ行きました。車いすのタイヤがパンクといったハプニングもありましたが、被災現場を実際に見て、シンポジウムで被災者の話を聞いた時以上に、心が痛み、切ない気持ちになりました。

この経験やこの時に感じた気持ちを、まだ被災地に行ったことかない人に、写真・もしくは文章などで伝えていき、今回の震災を忘れないようにすることが大事なのではないかと強く思いました。



# 被災地障がい者センターかまいしの活動に参加して

こんにちは。福井雅子、24歳です。脳性まひの障害があり、電動車いすを使用しています。高橋幸子さんと同時期にサマリアハウス福祉ホームに入居して丸2年たちました。

11月12日から17日にかけて、AJU自立の家の仲間とともに岩手県釜石市にある、被災地障がい者センターかまいし(以下、センターかまいし)の活動に参加し、釜石市、大槌町、陸前高田市の被災地を訪ねました。弱い立場の人は逃げられないことを痛感してきました。その報告をします。



活動を終え名古屋へ戻るメンバーたち  
筆者は前列右(いわて花巻空港にて)

## 当初の不安

釜石を訪問する前は本当に本当に不安で、「私が行ったことで、周りによけいな迷惑をかけてしまうのでは」と思っていたけど、センターかまいしのスタッフ小山さんから「あなたたち障害者がいるだけで、釜石の人たちや被災者の方が救われるんだよ」と言われ、少し緊張がほぐれました。

岩手の被災者のお宅に行って、いろいろと話をしたり、自分にできる事を見つけられた。「ありがとう」と感謝の言葉を頂いたことで、私でも力になれたんだと実感した。

## 被災地視察

陸前高田と釜石、大槌町に視察に行った。

一番衝撃を受けたのは、車がグッチャグッチャだったこと。形がなくて、津波がすごかったんだろうなという事を実感した。

実際に車いすで外に出て歩いて見たけど、道路はあるところもあったけど、途中で切れてしまうところがあったので、「こういうところに自分がいたら、一貫の終わりだ」という事を痛感した。今

はもうかなり片付いているが、被災直後は行けないところもたくさんあったし、被災直後はどこにも行けなかったのではないかと思います。

自分がこの津波を受けたらと考えた。もし介助者と一緒にいたら、介助者の人にも家族があるから介助者の人には「ごめん、先に逃げて」と言える覚悟が必要だという事を感じた。これでもし、「あなたがいたから死んだんだ」とか言われたら、本当にきつい。辛い選択だけど覚悟が必要。

もし地震が起きたら、一週間位は食料、水はこないと思うから備蓄が必要だと思う。

あと問題になってくるのはトイレ。

名古屋で自分だったらどこに避難するか・・・そういうことも現実的に考えていこうと思う。

## 子ども・人間関係

通学中の子ども、保育園バスで通う子どもを見て、「この子達の将来とかに影響が出るのでは、精神的に弱い子に育ってしまうのではないか」という不安がよぎった。

子どもは大人よりもまだこころとかが整っていないから、津波とかが来た後、建物とかがあつと

いう間に崩れてしまった衝撃から立ち直るためには相当時間がかかるだろうと思った。学校周りとかをして、私も力になれるのではないかと感じた。

普段から近所づきあいとか、困ってしまった時の為にお互いに助け合えるような仲間や、人との繋がりを大切にしていきたいと思った。

それと同時に、「障害」という言葉は何なんだろう・・・という疑問が湧いてきた。障害者だとか健全者だとか区別する必要はあるのか？私はないと思う。被災して困っているのはみんな同じ。困っているんだから助ければ良い。そういうことだと思う。

## 障害のある子の親から聞いたこと

あるお宅を訪問した際、障害のある子の親御さんから「被災者はみんな同じなんだから、あなた（障害者）だけが特別ではない」という話を聞かされた。特別扱いを望んでいるわけではないけれど、障害があることでより困難であることが訴えられないとすると...。そういう思いで生き抜いてこられた親御さんの気持ちもわかる気がするから、すごく複雑な気持ちになった。



東北地方の被災地障がい者（支援）センター  
（ゆめ風ブログの支援活動マップに加筆しました）

## センターかまいしについて

AJU自立の家では、発災当初より全国の障害者団体と連携して被災障害者支援に取り組んできました。緊急期、避難生活期を経て、東北沿岸部の復興と再生（新生）に向かう段階で、長期的な支援を決め、2011年10月にこのセンターを設立しました。

障害のある人も必要な支援を受けながら当たり前に生きられる地域づくりと地域興しをめざし、東北関東大震災障害者救援本部（構成団体＝DPI 日本会議、全国自立生活センター協議会、ゆめ風基金、共同連他）やカリタスジャパンなどと協働して、活動しています。2ヶ月の活動を経て、継続支援の利用者は32名です。

活動内容...被災障害者、団体への救援物資、ボランティア派遣、介助や送迎などの福祉サービスの提供、相談支援。被災障害者に関する情報収集、提供、情報交換、政策提言。被害を受けた障害者作業所などの再建支援。具体的には

- 被災した方（身体、知的、精神障害者）と、日中一緒に過ごす。
- 仮設住宅調査（スロープ設置状況・集会所所有無・障がい者入居状況）
- 障がい者関係の団体を訪問しニーズ調査。つながりを深める。
- 障がい者関係機関で行われる、連絡会・報告会等への参加

支援対象...釜石市を中心とした沿岸部の障害者と家族、関係者

### 被災地障がい者センターかまいし

<http://wadachi.ecom-plat.jp>

釜石市甲子町第10地割 599-1

TEL 0193-55-5400 FAX 0193-55-5401

E-mail [kamaishi@aju-cil.com](mailto:kamaishi@aju-cil.com)